

長澤有晃さんの思い出

栗倉輝彦

長澤有晃さんは、2011年6月22日の午後2時31分、80才5ヶ月間の生涯を終えられ天に召された。奥様は3年前の2008年10月11日にご逝去されたが、葬儀は同じ教会であった。

長澤さんは、水産学部の4年先輩にあたり、北海道さけ・ますふ化場に勤務されており、本場勤務時代は、中の島の近くの公宅であったことなどから、交流の機会があった。しかし、国際協力事業団(JICA)の専門家として、チリ国に派遣されるようになってからは、あまり交流の機会がなくなっていた。

これは、チリ国で長澤さんが関係していたプロジェクトと全く関係が無かったが、1979年1月にJICAがお世話をするアルゼンチンの研修生3名が来道した。同年、5月30日付けのアルゼンチン国ネウケン州知事の礼状によると、

その3名は Juan Ruben Garcia、Norberto Llantada および Alejandro Del Valle であったが、札幌滞在中、当時、小生が担当していた上川町のニジマス養殖場の魚病検査に一泊どまりで連れて行くことになった。スペイン語の通訳が一緒だったが、Alejandro だけが、英語が達者であり、旅館の食事の後、飲みに行ったバーで、色々な話をした。実はこの年の10月から海外研修でアメリカ、カナダおよびヨーロッパに3ヶ月間出張することが内定していたので、実習のつもりで話していたのだと思うが、Alejandro とはすっかり打ち解け合うことができた。なおこの時、Alejandro は31才、小生は43才だった。

北海道での研修が終了して、本州に向かう時、空港に向かうバス停で「アスタラビスタ・アミーゴ」と言って、握手をして別れたが、同年5月30日付けの礼状がアルゼンチン国ネウケン州知事から届いていた。



左から2番目が Alejandro Dell Valle (1979年1月27日)

それから9年程が経過して、チリ国で仕事をしていた長澤さんがアルゼンチン国ネウケン州のプロジェクト・リーダーに変わられたことを知って、9年前に頂いたネウケン州知事の礼状のコピーを同封して手紙を書いた。

まもなく、長澤さんから興奮された以下のようなお便りが届いた。

「同封あったネウケン州知事の貴兄宛礼状、誠に奇しき縁、礼状に示されている Alejandro Dell Valle はまさしく、現在 私のカウンター・パートであり、私が所属する事務所の所長です。彼は今でも時々、日本へ行った時の思い出話を花を咲かせますが、その記憶力の抜群さは舌を巻く程です。しかし、さすがに人の名前だけは不鮮明で、北海道で誰に逢ったか知りませんが、とにかく皆さんに大変親切にされ、大変な親日家になっています。親日家になるか、ならぬか、ここが日本研修受入れで最も重要なポイントであり、親日家となって帰国すれば、その研修はそのことだけで、大成功というものです。

Alejandro は性格も良く、明るい好人物で、私共（女房にも）には大変親切に、気配り、恐縮してしまう程です。お礼を言う毎に彼は「トンデモナイ、自分が日本で受けた親切から比べると10分の1もない。もっと何か出来ることがあれば、嬉しいのだが」と言っております。

日本で、何処のどなたか知らぬが、彼に親切にしてくれ

たお陰で、今9年後に私がお返しを受けている訳です。心秘かに、日本の彼に親切にしてくれた人に感謝していたところでした。その1人が我が旧友栗倉兄だったとは、本当に意外であり、世間の狭さを改めて感じます。そして、人との出会いが如何に素晴らしい事であり、大切にすべき事であることも知らされます。

この礼状を Alejandro に見せたら、彼もおドロキ、それを今まで保管されていた事、ドクトル・アワクラが自分の事を憶えていてくれた事、そして私が貴兄の友人であった事 etc の運命の糸の織りなす不思議な縁に感動していました。

貴兄の便りにもあったと通りの陽気な好人物で、毎日楽しく接触しています。勿論、仕事となれば業務上の日・ア相互にゆずれぬ面もありますが、好意が基礎にあるので、特に問題となることはなく、相互に理解と友情をもってやっております。

こちらとしても、魚病部門の協力が有り、ひよっとしたら栗倉兄に短期で来てもらう事になるかもしれません。その時は万難を排して来ア下さい。」

以上のようなきっかけで、1990年5～6月にアルゼンチン国ネウケン州に魚病対策の短期専門家として、27日間出かけることになったが、Alejandro さんとは11年ぶりの再会となった。

ネウケン州知事の礼状

Señor Gobernador de la
Provincia del Neuquén
Gr. Br. (R) DOMINGO MANUEL TRIMARCO
Casa de Gobierno
Roca y Rioja
8300 - NEUQUEN
ARGENTINA

May 30, 1979. -

Dr. TERUHIKO AWAKURA
Chief
Section of Fish Pathology
JAPAN


Dear Sir,



As Governor of the Province of Neuquén, Argentina, I wish to thank most deeply for your excellent hospitality extended to Mr. Juan Ruben García, Mr. Norberto Llantada, and Mr. Alejandro Del Valle, public officials of this government who have attended a technical training course in Japan from January to April, 1979.

The benefits of this specialization, will surely be of great importance to our Province and to our Government as well. I want to restate my deep gratitude to you, to your people and to the Japanese Government for the valuable assistance and cooperation received.

Sincerely yours


DOMINGO MANUEL TRIMARCO
Gr. Br. (R)
GOBERNADOR DE LA PROVINCIA DEL NEUQUEN



ネウケン州中央生態学試験場 (CEAN) 場長 Alejandro Del Valle と



長澤さんご夫婦：スタッフの家族と共に



長澤さん宅での送別会 左端 : Alejandro、 後列左端 : Claudio Omar Coria



Alejandro 宅での夕食ご招待 (左端 : 美人の奥さん)

開高健は魚釣りの旅行記「オーパ」を書くため、アルゼンチンを訪れ、ネウケン州のフニン・デ・ロスアンデスも訪れているが、その時、試験場の場長は Alejandro の奥さんのお父さんで、まだ結婚する前の奥さんを「大変な美人」と書いている。お会いしてみたら、本当に大変な美人であった。(この時、長澤さん:59才、小生:54才)

長澤さんとは、一月に一往復の航空便によるクラシックな文通とインターネットが普及し始めて、デジタルのお付き合いもあり、帰国後は何度かご自宅にお邪魔して、機器類の調整のお手伝いをする事もあった。また、長澤さんが使用していた出始めの頃のデジカメを譲り受け、最近まで「顕微鏡写真撮影用」に使用していた。



ご自宅前で (1998年12月30日)
後ろにシートを被っているのは、ご自慢の1945年製のジープ



ご自宅の書斎にて (1999年5月16日)
壁にかかっているのはAlejandroが描いた魚の絵



JICAのパーティで演奏する長澤さん (1999年11月5日)



チリ会にて (2007年9月22日)



チリ会にて (2010年9月25日 手元にある長澤さん最後の写真)

ネウケン州の JICA のプロジェクトで小生のカウンター・パートになったのは、当時 32 才で、国立ラバンバ大学獣医学部卒の Claudio Omar Coria であったが、恵庭にも 6 ヶ月間と 3 ヶ月間の 2 回の研修に来て、魚病検査などの技術を習得され、JICA の協力によって整備された CEAN の魚病実験室で、魚病対策業務に当たっていた。

2001 年の 5 月、Omar さんが急死されたというメールが入った。ハンタウイルス肺症候群 (HPS) という病気で、発病後間もなく亡くなったそうである。この病気は、ネズミを介して感染するが、日本には媒介するネズミもウイルスも知られていないが、1996 年にネウケン州のエル・ボルソンやバリローチェでヒトからヒトへ伝染したと思われる 20 例が報告されたばかりであった。JICA の魚病対策専門家として訪れた 11 年後で、第二の職場に移ってからすでに、5 年間に経過していた。

国際協力は、JICA の他にも 1994、1995 年に FAO の依頼で、ネパールにも行ったことがあるが、仲介の人達が外国人であったこともあって、長澤さんが担当されていた JICA のプロジェクトのように旨くは行かず、その成果には、問

題があった。

それにしても、立派に育ったカウンター・パートの Omar さんが急死されたのは、本当に残念であったが、国際協力におけるプロジェクトの継続性の難しさを実感させられ、それ以来、個人的には国際協りに消極的になったように思う。

長澤さんの海外協力の業績は、チリ国におけるものが良く知られており、近年、特に注目をあびている。奥さんもスペイン語が達者であったことから、老後はお二人で、スペイン語を話す国々の旅行を楽しんでおられた。

小生の場合、長澤さんとの交流は、海外でのご活躍の後半にあたるアルゼンチン以降の 20 年間であったが、貴重な経験をさせていただいた。お世話になったことに感謝しつつ、長澤さんご夫妻のご冥福をお祈りする。

栗倉輝彦

(2011 年 7 月 7 日、76 才の誕生日)